

## 無知の知の基底にあるもの

本学教授 箕浦 恵了

## 一

自己の自覚・「我」の自覚は思想の歴史における重要な事項の一つであるが、この自覚の問題に焦点を合わせて書かれた注目すべき哲学史に朝永三十郎先生の『近世における私の自覚史』（初版一九一六年）がある。先生は第一高等学校において内村鑑三のもとで学び、東京大学においてケーベル博士、井上哲次郎、中島力造ら諸教授のもとで哲学を学んだあと、清澤満之が学長となった真宗大学において哲学および哲学史の教授となり、その後京都大学と大谷大学の哲学講座を担当し、明治・大正・昭和という時期を通じて堅く平和主義を守り、高適中正の生涯をまっとうした尊敬すべき哲学者・哲学史家であった。『近世における

私の自覚史』は哲学史研究の古典的な名著である。この書の第一篇の末尾は「理性我の自律」と題され、その始めの部分は「西洋古代における私の自覚史素描」とでも称すべき叙述に当てられている。その所において朝永先生は「我」の自覚の歴史を説明しつつ、厳密な意味での「私の自覚」は「汝自身を知れ」を標語としたソクラテスに端を開いたとして、ソクラテスについて比較的詳しく述べようとされたのであった。その要点を簡条書風にまとめてみると、以下の四項になるであろう。

ソクラテスの第一の功績は理性の発見者であるということ。ソクラテスの偉大なる第二の点は、その発見した理性に対する強烈な信仰、実行上における理性の至高權威の実証であるということ。

第三に、かれは永遠なる生命を有すべき理性の擁護のために、感性的な時間的な自らの自我を犠牲として顧みなかつたということ。

第四に、ソクラテスによる理性の発見と、かれの殉道の死において最高潮に達したこの理性に対する真摯な信仰はプラトンによって発展され、理性の形而上学となったこと。

以上のようなソクラテス観の骨子は、朝永先生がドイツ

留學中にその許で学ばれた恩師ヴィンデルバントの『序曲』(Präludien)のなかの「ソクラテス論」に依拠されたものと思われるが、ソクラテスの本質を比類のない簡明さをもって美しく表現された論述である。朝永先生の言われる「我の自覚史」とは、古代ギリシャにおいてソクラテスに端を開き、近世に入ってカントによって精錬された理性の自律の歴史であり、その自覚史の源頭にソクラテスは位置せしめられている。このような卓越した、しかも気品漂うソクラテス観を前にするとき、今更にソクラテスについて語ることは躊躇なしとしない。

すでにヴィンデルバントもソクラテスについて語ることの躊躇を表明している。いささかの躊躇をもらしながらもヴィンデルバントは「ソクラテスのような人類史上の偉大な人物は、汲み尽くしえないから、その考究に沈潜することとは、たとい幾度なされたことであっても、常に新たな悦びと心の高揚とをもたらされる。僅かに視点を移すだけでソクラテスの新たな輪郭にまみゆることができるという点で、ソクラテスは汲み尽くしえないのである」と言っている。

『我の自覚史』のソクラテス観も、『序曲』におけるヴィンデルバントのソクラテス観とともに新カント学派的、

理性主義的ソクラテス観といってよいであろう。このようなソクラテス観は今世紀の標準的な哲学史において一般的であったソクラテス観ないしはソクラテス像であった。わたくしはこのようなソクラテス観を学びながら、しかし僅かながら視点を移してみることによって、ソクラテスの汲み尽くしえない新たな輪郭を垣間見たいと思う。殊に、「無知の知」を言うソクラテスの基底に人間の限界を見る宗教的自覚の存することを確認したいとわたくしは思う。ヨーロッパ諸学の危機ということが言われるが、現代直面している知の危機の意識に立つて改めてソクラテスの言う「無知の知」を考究することがいま求められていると感ずるからである。

## 二

ソクラテスにおける「無知の知」は、デルポイの神託の意味を解き明かそうとしたソクラテスの探究を機縁とするものであった。宗教と教育とにかかわる二重の罪を犯しているとして告発され、紀元前三九九年の春、アテナイの法廷に立ったソクラテスは、その弁明において一つの重大な出来事を語った。「ソクラテス以上の知者はいない」という神託がデルポイの神アポロンに仕えるピューティアー

(巫女)の口から伝えられたという。ソクラテスはこの神託を聞いたとき、神はいつたい何を語り、何を謎がけているのか思案せざるをえなかったという。何故なら、かれは自分が大事においても小事においても知者ではないことを自覚していたからである。神託は神の言葉であるからには真実であると考えなければならぬ。しかし他方、ソクラテスは自分が知者ではないことを自覚している。ソクラテスは、真実であると考えざるをえない神の言葉「神託」と、自己の「無知の自覚」との相反という事態に遭遇し、長いあいだ行き詰まっていたと語っている。この神託の謎を解くため、ソクラテスは知者であると思われる自分でもそう思っているひとを次々に訪問し、その人たちの知恵を吟味してみた。かれが知恵の吟味をおこなった人たちとは、まず政治家たち、詩人たち、そして手工術の制作者たちであった。吟味の結果はいずれの場合も同様であった。手工術の制作者たちはそれぞれ確かに「術知」(τέχνη)の心得があり、その点でかれらはソクラテスよりも知者であった。しかしかれらは、他の重大事についても、自分が大変な知者であることは当然だと思ひなす行き過ぎ (ἀναγκασία) を犯していることが判明した。かれらは知恵すなわち「術知」をもち、それとともにかれらが犯している「行き過

ぎ」が「あの知恵」を覆い隠している。すなわち「無知」をももっていることが判明した、とソクラテスと言う。テクストのその箇所は非常に重要であると思われる、また従来行われてきた諸家の読み方には同意しがたい点があるので、数行ほどの原文を読んでみよう。

「しかるに、おおアテナイ人のみなさん、詩人たちも優れた制作者たちも同じ間違いをしているとわたしには思われたのです。それはつまり、術知によって美しく成し遂げるがゆえに、他の重大な事らに關してもきわめて知恵ある者であることはそれぞれ当然だとしていたことです。そしてかれらのこの行き過ぎがあの知恵を隠しているのだとわたしには思われたのです」(Platon, *Apologia*, 22d-e)。

このようにソクラテスが語っているなかで、「あの知恵」とは何か。また「他の重大な事ら」とは何を指しているかという問題がある。バーネットやアダムら注釈者たちは、重大事とはアテナイの国政を指すと解し、「あの知恵」とは手工術の制作者たちの「術知」を指す、と注釈している。こうした原典理解はシュライエルマッハーやトマス・テラーの訳書(一八〇四年)においても同じである。

しかしソクラテスは国政をめぐる手工術制作者たちと対話したとは考え難いとわたくしは思う。また「あの知

「恵」とは、すこし前からすでに「人間的知恵」という表現でいわれてきた「無知の知」を指していると読むべきであろうとわたくしは思う。ソクラテスは、「無知の知」にはかならない「人間的知恵」にたいして、ソフィストたちのことを「人間並み以上の知恵に関する知者たち」と表現している。手工術制作者たちは「術知」をもち、その術知によって制作するものを美しく成し遂げることが出来るゆえ、他の重大な事らについても知恵があると思う思い誤り、「行き過ぎ」に陥り、この過誤が人間的知恵すなわち「無知の知」をかれらから覆い隠してしまっている、とソクラテスは指摘している、というのがわたくしのテキストの読み方である。そしてここに言われた「重大事」とはアテナイの国政ではなく、先に政治家たちの吟味において語られた大事すなわち「美而善な事」(καλον καγαθον)を、端的に言えば「善」(αγαθον)を指している、と思われる。

政治家たち、詩人たち、手工術の制作者たちを歴訪し、その知恵を吟味した結果、自他の無知が明らかになったとソクラテスは言うが、「無知」とは、「善」についての「無知」であると考えられる。ソクラテスの対話における根本的問いとは「善」についての問いであったと考えなければならぬであろう。この根本的問題を見据えながらソクラ

テスは「無知の知」を語ったのであろうと思われる。プラトンの筆になる『ソクラテスの弁明』において、この当面の箇所は政治批判、文芸批判、技術批判といった問題を含む重要な箇所である。換言すれば、政治術の批判、詩作術の批判、手工術の批判という問題がここにはあるが、「術」とは「術知」(τεχνη)であるから、これらはすべて「知」の批判であるということは改めてことわるまでもないであろう。

### 三

ソクラテスによる「術知の批判」を考究するに先立って、岐路に逸れるようであるが、『弁明』という著作に言及したい。シュライエルマッハーは一八〇四年にプラトン著作集のドイツ語訳全三巻を出版したが、その第一巻の本文にはなく、付録にかれは『弁明』篇を収録した。奇妙な取り扱いであるが、それは当篇を偽作と考えたからではなく、それは当篇が学問的主張を有していない著作であるからであり、ソクラテスの裁判と死という機縁に遭遇しての著作(Gelgenheitschrift)であり、プラトンの哲学的作品の系列の中には如何なる位置をも見出しえないものであるから、という理由によるとシュライエルマッハーは言っている。

る。『弁明』篇がシュライエルマッハーの言うような著作であるならば、当篇にある政治批判、文芸批判、手工術批判は当篇の範囲内だけのものにとどまり、プラトンの他の著作との関連を失ってしまうことになる。しかし現に、当篇に続く他の著作には上述の批判と軌を一にするような批判が展開されているのであるから、『弁明』篇の性格をシュライエルマッハーのように考える訳にはいかないであろう。

『ソクラテスの弁明』は確かにソクラテス研究の基本書という性格をもつ重要な文書である。しかもそれはプラトンという類い希な哲学的著作家によって書かれた著作に間違いのないものである。当篇に描かれたソクラテスはプラトンが見た哲学的実存としてのソクラテスの真の姿であり、同時にプラトン哲学の出発点ともなった内容を含む著作であると考えられる。このように考えてみると、わたくしたちは、『弁明』篇に「ごく手短に」というのも裁判所の傍らにある水時計の水の流れに急かされ、ごく限られた制限時間内に語り終えなければならぬ法廷弁論においては、簡潔にしか語りえなかつた「術知」の批判が、実は、どういふ批判であつたのか、その批判の内実をプラトンの他の著作を参照して補いながら読んでみる必要があるといふこ

とになるであらう。

限られた時間内に語られた法廷弁論では「術知」は、政治術、詩作術、手工術の三つが挙げられたにすぎないが、それはソクラテスを告発した三人が、詩人の代表としてのメレトス、手工術制作者と政治家の代表としてのアニュトス、雄弁家の代表としてのリュコンの三人であつたことに呼応して、三つの術知の批判に限って論弁が構成されたとかんがえることもできるのではないか。ソクラテスがデルポイの神託の意味を解き明かそうとして遂行した哲学的吟味はもつとさまざまな術知に言及した対話による吟味であつたと考えるべきであらう。

例えば、『カルミデス』篇における医術 (*iatricē technē*) への言及もその一つである。ソクラテスは頭痛の薬草を知っている。しかしその薬草は呪文とともに用いなければならない。そのことをソクラテスはポテイダイアへの出征中にトラキア人の医師から学んだという。その教えによれば、頭を離れて眼を、また身体を離れて頭を治療しようとは試みではならない。世話すべきは全体であつて、全体が善い状態でなければ部分が善い状態にあることは不可能である。なぜなら身体にとつても人間全体にとつても、善いことも悪いこともすべては魂から発して、そこから流れ出るので

あるから。それゆえまず第一に魂を世話しなければならぬ。しかるに魂は呪文のようなものによって世話される。その呪文のようなものとは美しい言葉である。その美しい言葉とは真の哲学的対話である。美しい言葉によって魂のうちには「慎み」(ソープロシユネー)が内生する。慎みが内生し具わって始めて、頭にも身体その他の部分にも健康をもたらすことができる。「慎み」と「健康」の両者を切り離して医者になろうとするのは人間の誤りである、というのである。この考えは、いわば心身の全体を一体として考える所謂全体主義医学の立場にたつての医療批判と見ることができらるであらう。

『酒宴』篇の末尾においては、詩作術に言及して、喜劇と悲劇とを作ることを知ることは同一人に属することであつて、術知をもつて悲劇作家である者はまた喜劇作家でもある、ということがソクラテスによって語られたのであるが、宴はもはや果てようとし、喜劇作家のアリストパネスはそれを聞きつつ眠り込み、悲劇作家で競演の優勝者アガトンもまた酒に酔いしれて眠り込んでしまったので、ソクラテスはそこを立ち去つた、とこの対話篇は結ばれている。これまた詩作術への痛烈な批判とみることができらるであらう。

術知批判の別な例をわたくしたちは『エウテュデモス』篇において見出だす。ここではソクラテスは、知識の獲得を「狩猟術」という語を用いて語っている。狩猟術とは獲物を狩猟する術知であり、狩人や漁夫たちは獲物を料理人に手渡す。幾何学者、天文学者、数学者は図形や天体や数にかんする発見をなし、知識の獲物を狩猟するが、その知識の使用については知らず、他人に手渡す。ちよど將軍たちが国や陣地を勝ち取り、いわば狩猟し、その獲物を政治家に手渡すように。また堅琴の制作術、笛の制作術はそれらの演奏術とは異なるゆえ、制作者は演奏家に作品を手渡す。もし術知がただ単に獲得術に他ならないとすれば、獲得したものを空しく蓄えるだけでは益はない。作ることを知っていても、作つたものを使用する知識がなければ何の益もない。ひとを不死にするほどの医術であつても、その不死の使用を知識していなければ益はないのである。手工術はもとより、さまざまな術知はたんなる獲得術・狩猟術に終わつてゐるのではないか。

政治術の一部の影像と考えられる「雄弁術」の批判は『ゴルギアス』篇に見られる。政治術の影像たる、すなわち偽の政治術たる雄弁によつて人間の幸福は求められるべきではない。なぜなら雄弁は教え知らせる説得ではなく、

多衆の欲求に「へつらう」説得である。しかし、人間の幸福は欲求にへつらいながら快樂において求めるべきではなく、「善」にこそ求めるべきである。美而善な人間こそが、男も女も、幸福であり、不正で邪悪な人間は不幸である。人間は善きものを得ることによってしか美而善な人間になり、幸福になることはできない。それは魂に関する術的な仕事によらなければならぬ。この術知は真の政治術でもある。それは大衆への「へつらい」によって国を肥大させる政治ではなく、魂が最も善くなるよう「最善」をめざし、過誤を懲らし吟味する政治術、とくに「司法術」たる

エレンコス（論駁）の哲学である。そのような真の政治術を知らない政治家たちのせいだ、「国家はむくんで、ふくれ上がり、内部は膿み腐っていることに（アテナイ人たちは）気がつかないでいる」（*Gorg.* 519a）、という。そこでプラトンはソクラテスにこう語らせている。

「わたしの考えでは、アテナイ人たちのうちで、真の政治術に着手しているのはわたし一人であるとは言わないまでも、その少数の一人であり、現今の人々のうちではわたしだけが国家の事を行っているのです。いつの場合でもわたしが語るのは、人々の悦びをめあてにしてではなく、最善をめざしているのですから」（521d）。

『ゴルギアス』篇におけるソクラテスのこの批判は『弁明』においてソクラテスが、自分は神からこのアテナイに遣わされた者で、巨大になりすぎた馬のように運動するに鈍くなってしまったこの市にはこれを覚醒させる蛇を必要とするのだ、と語った言葉と符号する。

「術知」（テクネー）を称しながら、政治術も詩作術も手工術も、そして医術も雄弁術も、どれ一つも「術知」・「知」の名に値しないことを吟味の末、明らかにしたのがソクラテスであった。この営為は非常に包括的な知の批判吟味であったと言わなければならないであろう。

現代ではハイデッガーによる技術についての批判的論究 *Die Frage nach der Technik* がある。技術の時代ともいうべき現代、自然はエネルギーの体系として対象化され、万物はいわば注文する (*bestellen*) ための在庫品 (*Bestand*) として考えられるに至っている、という示唆に富んだ批判を展開しているが、ハイデッガーの批判の射程に入っているのは、原子力時代の科学技術であり、政治批判などを含む包括的な視点はみられない。

#### 四

「知」の名にあたいする真の意味での「術知」をもって

はいないのに、それを有するかのように思う「思い」(ドクサ)は前述のように「行き過ぎ」・「過誤」であり、それは人間の陥る「暴慢」(ὕβρις)に他ならない。このヒュプリスに対して、人間は「慎み・慎知」(σωφροσύνη)をもたなければならぬ。言い換えれば、人間は自己の「無知」を知らなければならぬ。すでに古くからギリシヤ人の世界では「暴慢」(ヒュプリス)に陥ることを戒め、人間にとって「慎み」(ソープロシユネー)を肝要とする考えが顕著にあった。人間は自己の有限なることに覚醒しなければならぬ。それは死すべき者たる人間の自覚であり慎知である。かのデルポイの神殿に掲げられた銘文「汝自身を知れ」とは「慎め」(ソープロネイ)と同じ意味だとプラトンの『カルミデス』篇では語られている。そしてまたこの銘文「汝自身を知れ」は、「度を越えるな」(メーデン・アガン)という銘とともに、古代の七賢人たちによってデルポイの神殿に奉納された『プロタゴラス』篇は伝えている。

古代のギリシヤの賢人たちとは、自らを知恵有りと考ええる人たちではなかったことが、古い逸話として、ディオゲネス・ラエルティオスの『哲学者列伝』のタレースの章に見られる。かれらは知者に与えられるべき鼎を、ひとり神

のみが知者なりとして、デルポイの神アポロンに奉納したのであったという。

火ともなる術知をヘーパイストスのところから盗みだして、人類にこれを与えたプロメテウスは、その罪によりスキュティアの荒野に聳える岩山に縛られた。才智に長けた、過度に尊大な言葉を語るプロメテウスに向かって語りかけてオケアノスは言う。「汝自身を知れ」、そして神々のうちなる王ゼウスに従え、と。身に受けた罰は度を越えた尊大な言葉にたいする報いである。かつて弱気を知らず災いにも屈したことのないプロメテウスには、現在の災難にさらに災いを招こうとしている、と戒めている。ここでは「汝自身を知れ」という忠告はプロメテウスから火と術知とを与えられた人間にたいする戒めとして聞くことができるであろう。悲劇詩人アイスキュロスは人間の陥るヒュプリスを戒め、人間の有限性にめざめるべき洞察をさまざまに表現している。作品『アガ멤ノン』の言葉「受苦による学び」もその一つである。アイスキュロスのこの句はただだんに傷つき苦しむことを通してしか人間は知恵ある者になりえないとか、幻想をいだき幻想から覚醒されることを通じて、人間は始めて事物の正しい認識を得るのだという意味に終わる定式ではないであろう。アイスキュロスの

言う意味はもつと深い洞察であろう。受苦によって学ぶべきものは種々の事物ではなく、ひとえに、人間存在の限界への洞察に他ならない。神的なるものに真向かいになったとき、人間の廃棄されえない有限性こそ、その洞察の内実である。

医術の神アスクレピオスは、その術知の奢りから、また多額の黄金にまどい、死んだ人間を蘇えらせた。ゼウスの怒りにふれたアスクレピオスを詠って、賦与されしもの小さくあれば小さかるべし、われらいかなる定めにおかれしかを知れ、叙情詩人ピンダロスはいう。この詩人はまた言う「汝自らを知りてなれ」と。

神のみが真の知者であり人間の知恵はほとんどまったく無価値であるというソクラテスの「無知の自覚」は、古代ギリシャの宗教的伝統のなかでその意味を考究するとき、自己の有限性に目覚めた人間のもつべき「敬虔」とか「慎知」への洞察を含んでいることに気づかされる。人間は自ら陥りがちなヒュプリスを怖れなければならないのである。